

資料紹介

『祇園新地
娼婦名譜』園の夜桜

小林 勇

天保十一年正月発行の祇園新地の細見。横本一冊。『国書総目録』『古典籍総合目録』には記載がない。中野三敏氏が嘗て「天保末期には祇園新地の細見もあるというが、筆者の管見には入らない」（『洒落本大成』付録11）と述べられたものに相当すると思われる。同大成の付録27では伊東宗裕氏が中野氏の「論稿の京都の部分の補足」として、『新撰京都叢書』で翻印、解題を担当された二種類の細見を紹介しておられるが、本書に就いては触れておられない。祇園新地の細見では近年、浅川征一郎氏著『鴨東四時雜詞註解』特製本の付録として、寛政十年、同十三年刊の一枚刷のものも複製されたが、吉原岡場所共に資料の比較的豊富な江戸に比して京阪のそれは量的に乏しいので、斯る零細なものではあるが紙面を借りて紹介してみようと思う。

但しこのように書くとき全く未知の新しい資料のようであるが、実はそうではない。本書の祇園花街資料として最も価値があると思われるのは、巻末に付された「花の枝折」と題する詳細な価附であろうが、この部分は昭和二年刊の上林豊明氏著『かくれさと雑考』中に、天保十一年六月発行の本書改正版を以て既に影印翻刻がなされている。ただ上林氏の著書も刊行後半世紀以上を経て、必ずしも容易に参照出来るものではなくなっていると思われるし、同書中に引用された本書に就いて言及したのも管見に入らないので、より前位の刊本の全体を紹介することには猶それなりの価値があるであろう。

次に書誌を記しておく。

表紙 朽葉色地に収載される娼家の商号を散らし模様如く刷り込む。六・四糎×十五・七糎。

題簽 欠。

構成 序半丁、凡例半丁、名寄八丁、花の枝折序半丁、花の枝折二丁半、広告・刊記一丁。以上、全十三丁。

柱記 序から名寄の六丁目(丁付にして七丁目)迄「ヨ」。以下なし。

丁付 序から名寄に通しで「一」〜「九」、花の枝折は丁を改めて「一」〜「三」。広告・刊記にはなし。

匡郭 四周単片。但し花の枝折序のみ隅入りの子持ち枠。五・九糎×十四・一糎。

以下紹介に当たっては、上段に影印を掲げ、下段に翻刻を付す。但し名寄部分は多少縮小されても判読に困難はないと思われるので翻刻を省略し、影印のみを三段に掲げることとする。






(表表紙)

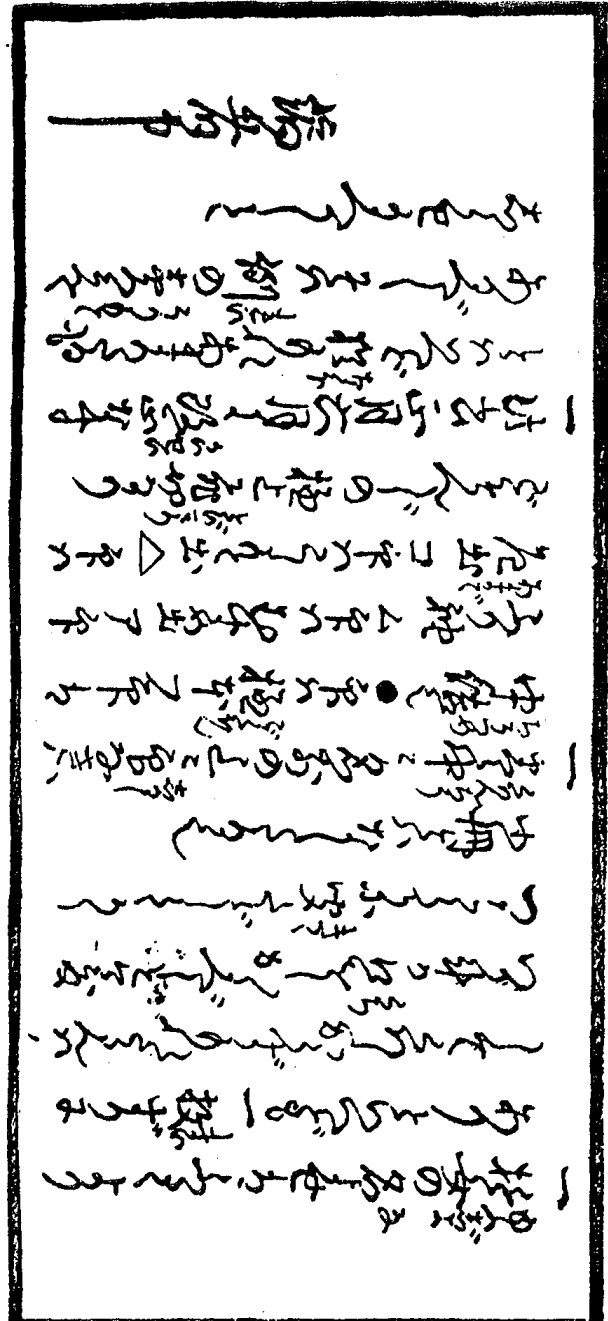


(裏表紙)

(一才・序)

	不來身重之隆	常設解之成之	細之胡之金吾如	囊冊歌妓名譜号	照子之金吾如	名簿題夜秘焉然	店肆之女有冒限而不	足令人目歛之倖有	称点茶女者以交錄	之觀者察之勿笑	其紛と云	桃李散人	 
---	--------	--------	---------	---------	--------	---------	-----------	----------	----------	---------	------	------	--

(一ウ・凡例)




一 遊女の名よせはふるくより
ありといくども一枚ずりに
してくハしかるずもれたらん
いか斗か口をしかるべしと今度
つはらかに聞たゞしてかく
小冊とハなしたる也
一 卷中二名前の上二印なきハ
中詰也●印ハ極本ノ印は
ふり袖△印ハむすめ出ア印
尾出コ印ハこしもと出△印ハ
どそんじの極上飛切なり
一 此書正月六月に改正なす
とハいへど猶もれあまりたるも
あるべしそハ例の壺元へ
しらせ給へかしと
編者申

(三・ウ)

● ● ● ● ● フ フ ム

あさハさかゑせハ鶴をいまあきま
みだきやゑいの川きよりなとにぬめ

(四・オ)


きく は	 井ノ口 井ノ口 井ノ口	另・ ふかや ぢぢう	△△ きき いく 代の	素 柳	櫻 櫻井 東家
		ぢぢう 葉葉 ま	正 川 ね	きの 柳	素 柳

(四・ウ)

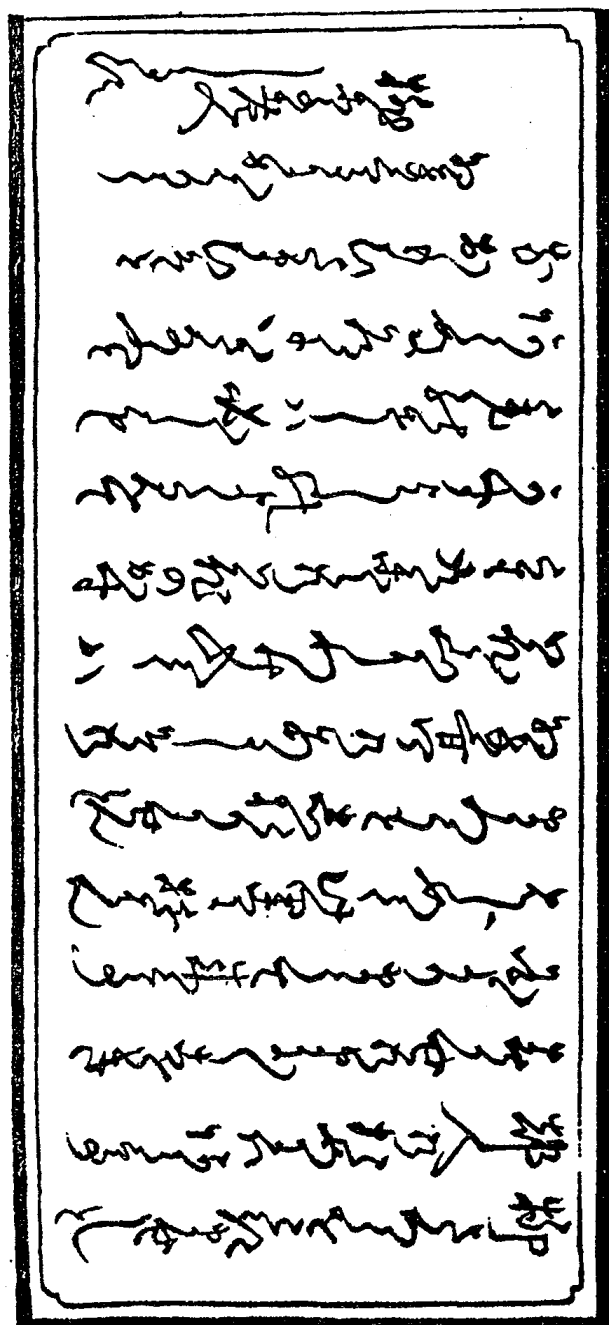
ム

小ち花いて友思きゑそそひま美はき
 きよつりるのぎくののどやのあのるこ
 くふるるのののののののののののの

(九・乙)

フ フ ム												 系井園實物		
小	を	小	う	さ	あ	小	よ	か	る	み	友		や	勇
い	ふ	う	し	や	い	き	の	け	ま	さ	う		く	

(一・木)



柳さくらをこまかせしと
 都人のためにハあらて
 春かせのまにハ遠き
 園よりまうて来て
 はしめて此里に遊はん
 おろうとしおりにせんと
 翠亭のあるしその
 花山にわけ入てハ
 重九愛の花のかす
 かすよしのよく見て
 ものせしハ必しも
 あらぬ道にいさなふと
 なおもひたまひそと
 翠亭にかはりて
 桃李老人
 するす

(7.1)

○ 附錄
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

祇園新地 娼妓價目

○素人の価附

通称△とらふ

一花いっせき一席時一ツ話八奴六分

一層日柄花四ツ卅四又四分ひるひから

恒の事へお返し

二夜約東花四ッ卅四又四分よるやくそく

但くれより夜ハツ時まで

朝むかひ迄おけば花一ツ付

一朝より昼^{ひる}まで花ニツ十七^{おとせ}分

一晝よりくれ迄花ニツ甘五奴八分

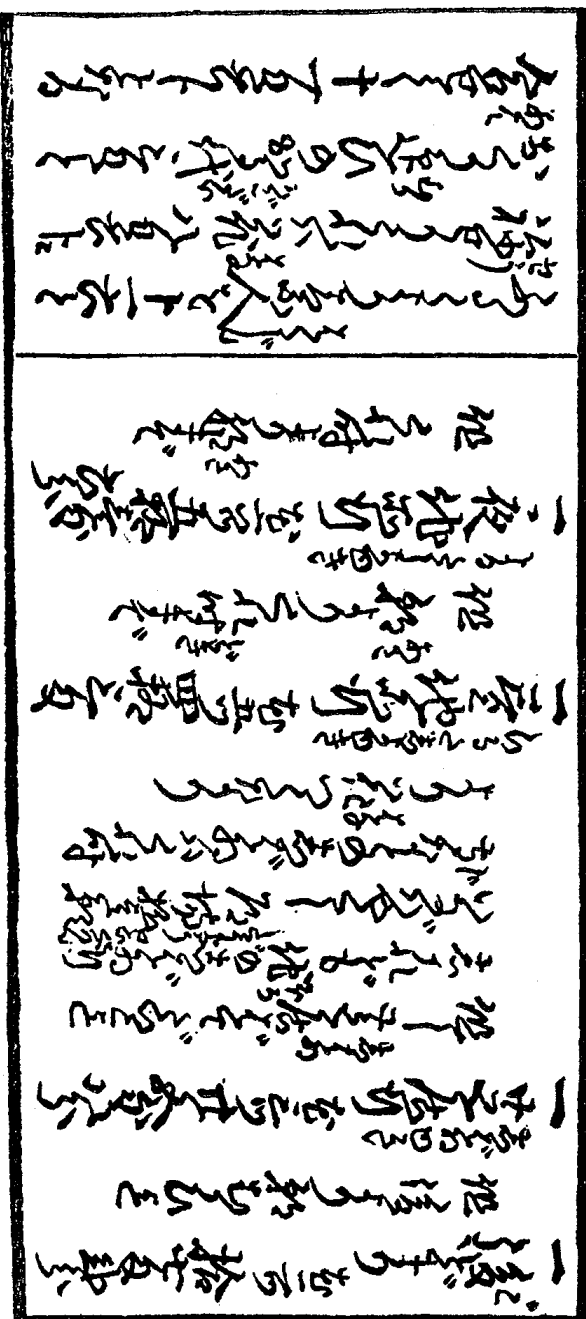
一、くれ^ら後まで花ニツ廿五奴八分

但し後とはよる九ツ時の

たにせいの

祇園新地 花の枝折

(二・オ)



一 後どまり花二ツ拾七匁二分
 但後より朝むかひ迄
 一 芝居行花三ツ廿五匁八分
 但し芝居はてだいに迄
 しかれども他のしはる行
 いなばやくし道場誓願
 寺などのしはるハくれ時
 より花つくなり
 一 昼他所行花五ツ四拾三匁
 但朝よりくれ時まで
 一 夜他所行花六ツ五拾五匁六分
 但くれ時より朝まで
 称せりこれは花八匁六分二
 おくり迎ひの襦代三匁と
 合せて十一匁六分となる

(11・5)

<p>一花一本時四つめ式処三分 一昼日柄十二本廿七処六分 但し屋より晝まで 一夜約東十三本廿九処九分 但し晝時より朝むかひ まてをいふ 一朝も屋迄八本拾八処四分</p>	<p>女郎の価付 いふもあらしとなり うちにも右に同じき△と また其ころは女芸者の 六分を花一ツとなし△といふ むかひをなさずよつて八処 寛政のころより駕のおくり かるかゆゑ十一六といひしが</p>
--	---

女郎の価付

(三・五)

一 夜他所行十六本三拾七処八分
但し朝よりくれときまで
一夜他所行十三本貳拾九処九分
但しくれ時より朝まで
右惣じて女郎ハ極本
極中ふり袖むすめこし元
尻出二いたるまでいづれも
同前にてかはる事なし

一 夜他所行十六本三拾七処八分

但し朝よりくれときまで

一夜他所行十三本貳拾九処九分

但しくれ時より朝まで

右惣じて女郎ハ極本

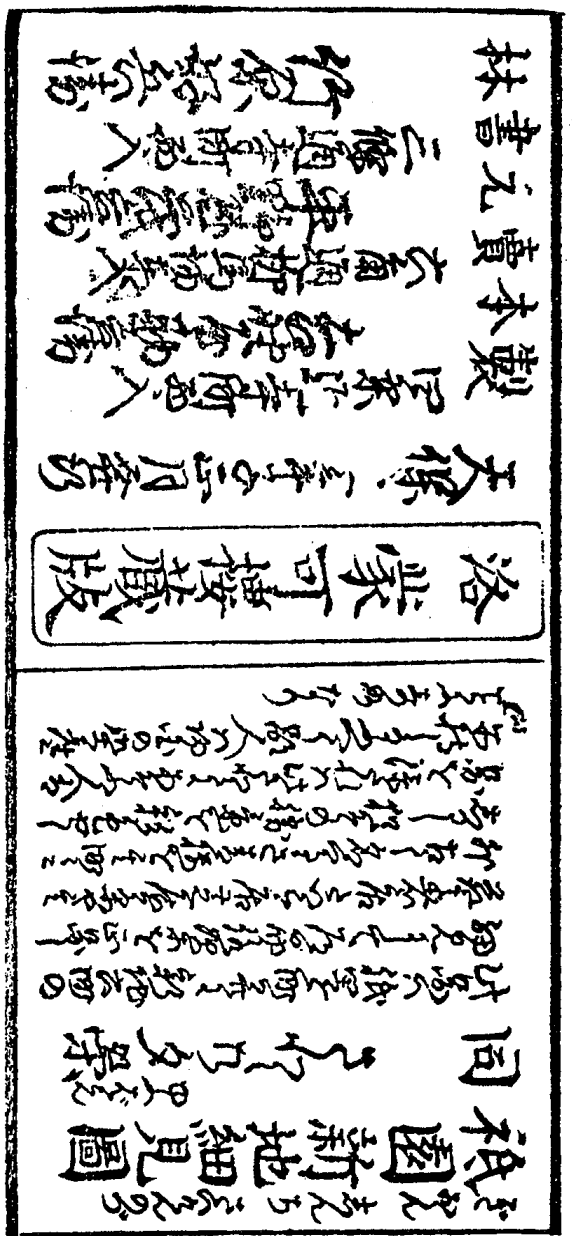
極中ふり袖むすめこし元

尻出二いたるまでいづれも

同前にてかはる事なし

追出目録	
下川原 見 影	影 見 全
新地園街 全	全 見 影
雪名垣 見 全	全 見 影
二条衛 見 全	全 見 影
宮川 見 全	全 見 影
北野 見 全	全 見 影
（下付ナシ・オ）	

追出目録	
下川原 見 影	影 見 全
是書ハことの夕はえと同しく 勝景を一枚すりにして円山双林寺の 坊舎二軒茶やなんと名高き 所々をしるし町々に舞妓の名 定紋をつへらにしろしたる也	同祇園街 新地園の夜桜全
こハ遊女茶たて女の名よせに して老若の三品をわかつて 園の花と一つらになすべく書也	細西石垣花の追風全
地二条新川そひ柳全	宮川見三千世の桃全
北野見梅の魁全	いづれも追々上木仕候御評判 よろしく奉希上候 売元白



(丁付ナシ・ウ)

祇園新地細見圖
ぎおんしんちほそみずゑのづ
 同 ざとの夕栄
ゆふはる
 此図ハ祇園町并に新地六町の
 細見にして道筋路次等を正図し
 芸者店たいて店芝居茶や其
 外古く名高き青楼を其町々二
 するし猶その勝景を彩色せし
 図を添たれハ此さにあそふ人は
 所持し給ふへう鄙人ハ帰国の御土産ニ
 ことに奇妙なり

洛 蒙可樓藏版

天保十一年子正月發行
 製 本 四條通寺町西へ入
 本 吉野屋勘兵衛
 元 六角通柳馬場東へ入
 元 平野屋茂兵衛
 書 三條通寺町西へ入
 林 竹原好兵衛

以上で本書の紹介を終わるが、少々蛇足を付しておく。先ず本書の編者であるが、序文では序者の桃李散人（花の枝折序では桃李老人。同一人であろう）がその人のようでもあるが、やはり別人か。その場合花の枝折の著者とされる翠亭が編者であろうか。両者とも未詳の人物であるが、翠亭は同じ天保十一年春刊行の「祇園新地細見図」の編者青々楼翠竹主人と同人であると思われる。この細見図は本書の広告中に名が見えるもので、「製本売元書林」として名を連ねる三肆の内吉野屋を除いた、竹原、平野屋の二肆から刊行されている。この細見図が本年の新版とすれば本書も前年度版があつての改訂版ではなく、恐らく地図と名寄をセットにしてこの年に新版として売り出されたものである。内題右に「正月六月改正」とある如く、天保十一年六月版は今日伝存未詳ながら『かくれさと雑考』中に一部が紹介されていて存在したことが確実である。但し翌年以後の続刊は不明。翌年の天保十二年は天保の改革令が出された年であり、更に翌々天保十三年には岡場所が取り払われて京都でも島原以外の遊所の営業が禁止されているのであるから、この種の書物の刊行は難しい雰囲気になってきていたであろう。本書の広告によれば更に多くの遊所の細見が予定されているが何れも今日存在が知られず、これらも刊行に到らなかったものか。但し書物の性質上後世に残り難いものなので即断は出来ない。

本書の序文によればこれより先に「園花」と題する芸妓の名寄があつたことになる。これも今日では伝存未詳であるが、幸い『守貞漫稿』中に「天保十年多極月刊行園の花と云書に」として一部の透き写しとともに紹介されているが、その実在を確認出来るとともに概要が知られる。それでは芸妓の置屋は十三戸ということで、『園の花』紹介の直前に列挙された置屋がそれであるとすれば、それらは当然の事ながら本書とも一致している。ただ本書に挙げられた置屋は十二戸で、『守貞漫稿』及び「祇園新地細見図」と比較して末吉町の京屋喜兵衛を欠く。これは京屋が当時芸妓のみで娼妓はいなかったものであろうか。或いは本書の名寄は九丁で次からは丁を改めて花の枝折となっているが、本来十丁が存在しそれが京屋の名寄であつたものが偶々本書では落丁となっているものかとも考えられるが、他

本と比較出来ない為判然としない。

付載された「花の枝折」は当時の娼妓の揚代を細かく記しており、この部分が本書の祇園花街資料としての価値の最も高い部分であると思われるが、ここでは「素人」と「女郎」が区別されている。この「女郎」は恐らく序文に言う「点茶女」、即ち茶立女、見世附の事であろう。白人が置屋から茶屋に出掛けていって客に会するのに対し店内で売淫するという違いがあり、揚代もここに見る如く白人よりはかなり安価である。序文には「倅二点茶女ト称スル者有り以テ之ヲ交ゼ録ス」とあるが、置屋に白人と見世附が同居しているとは考えられないので、これはこの価付の部分を指すのであろう。ただその前には「然レドモ店肆ノ女ハ員限有リテ人ノ目ヲシテ之ヲ欲バシムルニ足ラズ」とあり、白人だけでは人数が少ないので見世附の名も加えたように読める。又広告にもそうある。或いは天保頃にはさような事もあったものであろうか。後考を俟ちたい。猶慶応三年版の『艶歌花乃枝折』という京都諸花街の遊興費を記した書があり『新撰京都叢書』第九巻に翻印されているが、その序文は漢字仮名の相違があつて本書版木の流用埋木とは考えられないものの、人名等を変えただけで本書の「花の枝折」序文と殆ど同文であることを付記しておく。

最後に本書の蔵版者として名の見える蒙可楼は無論戯名であるが、しかし一時のものではない。管見の範囲内でも他に前年の天保十年に刊行された『天保佳話』、及び四年後の弘化元年刊『風俗三石土』（安穴道人の序文は天保十二年にその名を見る（『風俗三石土』では蒙仙楼に作る）。そして『風俗三石土』では本書同様蔵版者であるが、『天保佳話』は見返しに「書林 蒙可楼梓行」とあり出版者である如くである。同書は四都書肆五肆の合版であるが、本書に「洛蒙可楼」、『風俗三石土』には「神雉 蒙價楼」とあるので所在地は京都でなければならぬ。そして同書の版元中京都の書肆は平野屋茂兵衛、山城屋佐兵衛の二肆でこの何れかが蒙可楼ということになる。内平野屋茂兵衛は本書の「製本売元書林」にも名を連ねているが、本書の刊記は蔵版者と販売者が別々であることを示しているから、蒙可楼は山城屋ということになろうか。無論平野屋が別々に名を出していることも考えられるが、しかし何れにせよ蔵版

者が書肆であるならば何故版權のみを有して出版、販売を他肆に委託するのであろうか。『風俗三石士』は三都四肆の合版で京都の書肆は越後屋治兵衛、林芳兵衛の二肆であるから平野屋、山城屋のどちらにも出版、販売に關与していないことになる。尤も『天保佳話』の後印本では刊記の京都の二肆が越後屋、林の二肆に替わっており、（見返しは元のまま）又平野屋の名で板行証文が出された『天保佳話二編』（『京都書林仲間記録』第二冊「小草紙証文帳」）が實際にはこの二肆から出版されている（猶『天保佳話』の板行証文は山城屋から出ている）等、この二肆が平野屋乃至山城屋と特別な關係を有していることも考えられるが、猶藏版者が書肆でありながら出版、販売に直接關与していないのは疑問である（因みに『近世書林板元總覽』では平野屋は文久三年、山城屋は明治八年迄の出版活動が確認される。山城屋は現古書店の藤井文政堂である）。この事から『天保佳話』見返し「書林」「梓行」の文字に關わらず、蒙可樓を書肆以外に比定することは出来ないものであろうか。その場合単純ではあるが『天保佳話』『風俗三石士』ともに安穴道人に深く關わる書であるから、先ず思い浮かぶのは中島棕隱である。『鴨東四時雜詞』の作者にして好事儒者の彼が祇園の娼妓の細見の、又ひょっとすると前年の芸妓の細見の場合も、その藏版者であつたとすれば誠に面白く思われるのである。無論蒙可樓が直ちに中島棕隱でなくとも「安穴と蒙價（可）樓の關係ただならぬものを覚える」（『大東急記念文庫 善本叢刊』洒落本集所収『風俗三石士』解題、中野三敏氏）のは事実であり、本書に彼が何等かの形で關係している可能性は小さくないであらう。